



四天王像 その1像 (甲賀市・龍福寺)



四天王像 その4像 (甲賀市・龍福寺)

〈資料紹介〉

龍福寺（甲賀市甲賀町滝）所蔵 木造四天王立像

和 澄 浩 介

はじめに

甲賀市甲賀町滝に所在する龍福寺は、十二世紀の造立になる薬師如来坐像（重要文化財）を本尊とする天台宗寺院である。本尊を納める厨子の左右脇壇に安置される四天王像は、後世の厚い補彩に覆われ像容を窺うことが困難だが、幸いにもこの度調査の機会が得られ、四軀とも平安時代にさかのぼる貴重な例であると判断されたため、ここに報告する^(一)。

なお後述の通り、左右脇壇内側の二体と外側の二体で造立年代が異なるため、本稿では便宜的に右脇壇内側の像をその1像、左脇壇内側の像をその2像、右脇壇外側の像をその3像、左脇壇外側の像をその4像と呼称する^(二)。

形状

・その1像

髪は平彫りとし、垂髻を結う。天冠台は紐二条と列弁とするか。目は瞋目とし、閉口する。領巾を着ける。胸甲と腹甲を紐と腹帯で締め、前盾と腰甲をベルトで留める。両腕に鱗袖と大袖をあらわし、小手を着ける。下半身に裳、裙、脛当を着け、沓を履く。天衣がベルトにかかり、前盾の前を横切る。背面に大きく獣皮をかける。右手は開いて腰前に当て、左手は振り上げて三鈷戟の先を握る。左足を上げて邪鬼上に立つ。邪鬼は禪のみを着ける。頭部を右に向け斜め前方を睨み蹲

る。両拳を顔の横に添える。

・その2像

髪は平彫りとし、垂髻を結う。天冠台は紐と列弁をあらわすか。領巾を着ける。胸甲と腹甲を紐で締め、獅噛をあらわす前盾と腰甲をベルトで留める。両腕に二段の鱗袖と先端を結んだ大袖（左端部亡失）をあらわし、小手を着ける。下半身に裳、裙、脛当を着け、沓を履く。天衣がベルトにかかり、前盾の前を横切る。背面に大きく獣皮をかける。右手は振り上げ三鈷杵（脇鈷亡失）の先端を握り、左手は拳を握り腰前に当てる。右足を上げ、岩座に立つ。

・その3像

髪は平彫りとし、単髻を結う。こめかみの上に炎髪を逆立てる。鬢髪を耳中央で巻き込む。髻前に三頭形の冠をあらわす。天冠台は紐と列弁をあらわすか。領巾を紐で縛り、結び目を正面にあらわす。胸甲と腹甲を紐で締め、獅噛をあらわす前盾と腰甲をベルトで留める。両腕に鱗袖と大袖をあらわし、小手を着ける。下半身に裳、裙、脛当を着け、沓を履く。天衣がベルトにかかり、前盾の前を横切る。背面に大きく獣皮をかける。右手は振り上げて握り、左手は垂下して前方に突き出して握る。右足をやや上げて岩座上に立つ。

•その4像

地髪部は平彫りとし、単髻を結う。髻は疎ら彫りとし、髪束を左右に振り分ける。こめかみの上に炎髪を逆立てる。鬢髪を耳中央で巻き込む。髻前に三頭形の冠をあらわす。天冠台は紐二条とするか。領巾を着ける。胸甲と腹甲を紐で締める。紐は背面にもあらわれる。獅嚙をあらわす前盾と腰甲をベルトで留める。獅嚙は顔の横から両腕をあらわし、垂らす。両腕に鱗袖と小袖をあらわし、小手を着ける。下半身に裳、裙、脛当を着け、沓を履く。天衣がベルトにかかり、前盾の前を横切る。背面に大きく獣皮をかける。両腕とも垂下し、やや前方に突き出し、右手は掌を下にして筆を握り、左手は掌を上にして握る。左足をやや上げて邪鬼上に立つ。邪鬼は右方に頭部を向け前方を睨み両手足を折って蹲る。

品質・構造

•その1像

針葉樹（ヒノキか）。一木造。彫眼。彩色。

頭体幹部を、木心を前方に外したヒノキかと思われる針葉樹の一枚から彫出する。両肩以下は肩、手首で矧ぎ、肘でも矧いでいるかと思われる。袖の矧目は不明。左大腿部外側に一枚を矧ぐ。左手首以下一枚製、右手首以下は掌と指を別材とする。内削りを施さない。邪鬼は木心を右耳後方に籠めた針葉樹の一枚から彫出する。内削りを施さない。底面に丸柄穴を一つ穿つ。

•その2像

針葉樹（ヒノキか）。一木造。彫眼。彩色。

頭体幹部を、木心を後方に外したヒノキかと思われる針葉樹の一枚から彫出する。両肩以下は肩、手首で矧ぎ、肘でも矧いでいるかと思

われる。袖の矧目は不明。右脚部を矧ぐかと思われるが、矧目は不明。

•その3像

針葉樹（ヒノキか）。割矧造。彫眼。彩色。

頭体幹部を、木心を後方や左に外したヒノキかと思われる針葉樹の一枚から彫出する。背面から内削りを施し、背板を当てる。右肩以下は肩、肘で矧ぎ、左肩以下は肩、手首で矧ぐ。両沓先に一枚を矧ぐ。左足柄は沓先と共木とし、右足柄は別材を矧ぐ。なお、背板は後補であり、後述の通り対とみられるその4像が背面を割矧いでいることから、本像も当初は襟以下を割矧いでいたかと考えられる。

•その4像

針葉樹（ヒノキか）。割矧造。彫眼。彩色。

頭体幹部を、木心を後方に外したヒノキかと思われる針葉樹の一枚から彫出し、肩下がりから裾までを割放つて内削りを施す。両肩以下は肩、手首で矧ぐ。左沓先は割損部に後補材を矧ぐが、当初は体幹部材と共木から彫出していたと考えられる。

保存状態

•その1像

右手首以下、左肩矧面の丸柄、持物、岩座、框座、表面彩色、以上後補。

•その2像

左肩以下、持物、台座、表面彩色、以上後補。左大袖先端、右沓先、以上亡失。

・その3像

背板、両杵先、足裏角柄、台座、表面彩色、以上後補。

・その4像

左手首以下、左杵先、邪鬼、表面彩色、以上後補。

備考

本像は、甲賀市甲賀町滝に所在する天台宗寺院向陽山龍福寺本堂の脇壇に祀られる。須弥壇中央の厨子内には半丈六の本尊薬師如来坐像を安置し、左脇壇外側よりその4像、その2像、本尊を挟み右脇壇内側よりその1像、その3像を配す。現在本像は四軀一具の四天王像として祀られるが、作風、構造からその1像とその2像、その3像とその4像の二類に大別でき、本来それぞれが一具を成していたと考えられる。

その1像とその2像は、動きが少なく、鎧の凹凸も小さく、総じて平明で穏やかな作風を示す。特にその1像は胴回りが太くどっしりと落ち着いた雰囲気を示す。振り上げる腕やひねる腰の接続も破綻がなく、翻る大袖も自然な動きが表現されており、優れた作風を見せる。県内での類例を探ると、東近江市・石馬寺二天像、栗東市・金勝寺四天王像（山口寺旧蔵）、栗東市・大通寺保存会広目天像等が挙げられる。その1像、その2像の造立年代もこれらの像同様十二世紀と考えられる。

その3像とその4像は、その1像、その2像に比べて頭部が大きく、首が太く、やや寸の詰まった重厚な作風を示す。両像とも鬘髪が耳で巻き込み、頭部前面のみに立ち上がる前盾状の宝冠とこめかみ付近の炎髪をあらわすが、この特徴は十世紀末から十一世紀の作と考えられる国所
有四天王像（近江八幡市・冷泉寺旧蔵）のうち兜を被らない持国天像、
広目天像や栗東市・東方寺兜跋毘沙門天像に見受けられる。全体のプロ
ポーションとしては、同じく十世紀末から十一世紀の作と考えられる大

津市・若王寺四天王像に通じるが、表情をはじめ表現がより穏やかになっていることから、十一世紀前半から半ばの作と考えられる。なお、若王寺像は四軀とも前盾状の宝冠をあらわし、多聞天像は鬘髪が耳で巻き込む。

その4像については、両腕を下げて拳を握る手勢（左手首は後補）と大袖をあらわさない点が四天王像としては特異である。四天王もしくは二天像で両腕を下す例としては、愛荘町・金剛輪寺広目天像、三重県・市場寺持国天像、奈良県・法隆寺新堂増長天像等が挙げられるが、いずれもどちらかの肘を曲げ、市場寺像と法隆寺像においては左手の全指を開く。その4像のように、両肘をほとんど曲げず拳を握り、なおかつ大袖をあらわさない例は、四天王像や二天像の中には見出すことができないが、十二神将像中には比較的多く散見される。これは『覚

禅鈔』と『白宝口抄』に載せる十二神将図像のうち「世流布像」の辰神（安備羅）が、太刀を腰に帯び、鞘を左手で、柄を右手で握る姿に倣うもので、兵庫県・東山寺像中の丑神、奈良県・興福寺像中の波夷羅、東京都



挿図 その1像邪鬼

立博物館像（京都府・浄瑠璃寺伝来）中の辰神、竜王町・龍王寺像中の戌神等に見られる。その4像も十二神将中のうちの一軀と考えることもできるが、そうであれば比較的大型の例と言える。なお、龍福寺本尊像は半丈六の大きさを誇る薬師如来坐像だが、その4像とは造立時期が異なり一具の作とは見なし難い。また、その4像と一具と考えられるその3像の形式は、四天王としても十二神将としてもごく一般的なものである。ここでは、その3像とその4像について、十二神将像中の二軀であった可能性もあることを述べるにとどめる。

本四天王像は、全体が後世の厚い彩色に覆われており当初の造形や構造が不鮮明であるが、造立時期の異なるそれぞれの像がいずれも平安時代にまで遡る古像であることが確認された。その1像が当初の邪鬼（挿図）を伝える等後補部分も少なく、保存状態も比較的良好である。この報告を機に周辺地域の歴史文化の解明が進むことを期待する。

（わずみ こうすけ・滋賀県立琵琶湖文化館主任学芸員）

註

（一） 調査は二〇二〇年九月七日に実施し、筆者の他左記の各氏が参加した。

桑田美佐登、駒井文恵、佐野正晴（以上甲賀市）、一村武司、桑原康郎、高梨純次、辻上祐貴（以上MIHO MUSEUM）

なお、撮影は小池澄男氏（MIHO MUSEUM）が行い、本稿に掲載した図版はMIHO MUSEUMより提供を受けた。

（二） 法量は左記のとおり。（数値はcm）

・その1像

像高一〇・六／髮際高九七・六／頂―顎二四・五／面長一一・五／面幅

一〇・〇／耳張一五・二／面奥二四・八／肩張二二・七／肘張六三・八／袖張五八・一／胸奥（右）一六・七（左）一七・六／腹奥二〇・二／裾張三二・六／足先開（内）二四・一（外）三五・一

・その2像

像高一二・〇／髮際高九九・九／頂―顎二四・五／面長一一・〇／面幅一〇・〇／耳張一五・〇／面奥一四・四／肩張二四・二／肘張六四・一／袖張四九・五／胸奥（右）一七・五（左）一六・七／腹奥二二・四／裾張三四・五／足先開（内）二三・〇（外）三二・九（右沓先亡失）

・その3像

像高一〇四・六／髮際高九三・六／頂―顎二二・二／面長九・八／面幅九・八／耳張一四・八／面奥一五・一／肩張二〇・二／肘張四一・九／袖張三四・〇（右袖は内側に翻る）／胸奥（右）一五・〇（左）一五・三／腹奥一八・〇／裾張二七・三／足先開（内）二〇・六（外）二九・一

・その4像

像高一〇五・二／髮際高九四・五／頂―顎二四・一／面長一〇・九／面幅一〇・六／耳張一七・五／面奥一七・〇／肩張二三・四／肘張四二・九／胸奥（右）一六・九（左）一七・二／腹奥二〇・〇／裾張三二・四／足先開（内）二二・〇（外）三〇・六

龍福寺住職梅田義将氏には図版掲載のご許可を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。



図2 その1像 右側面



図1 その1像 右斜側面



図4 その1像 頭部右斜側面



図3 その1像 頭部正面



図6 その2像 左斜側面



図5 その2像 正面



図8 その2像 頭部正面



図7 その2像 右斜側面



図10 その3像 左斜側面



図9 その3像 正面



図12 その3像 頭部正面



図11 その3像 左側面



図14 その4像 左側面



図13 その4像 左斜側面



図16 その4像 頭部左斜側面



図15 その4像 頭部正面